手習

五拾三

その比横川になにかし僧都とかいひていと
たうとき人すみけり八十あまりの母五十ハかりの
いもうとありけりふるき願ありてはつせにまうて
たりけりむつましうやんことなく思ふてしのあさりを
そへて仏経くやうするなとおこなひけり事ともお
ほくしてかへるみちにならさかといふ山こえ
けるほとよりこのはゝの尼君ここちあしうし
けれはかくてはいかてかのこりのみちをもおはし
つかんともてさはきてうちのわたりなりける
しる人の家ありけるにとゝめてけふハかりやすめ
奉るになほいみしうわつらへは横川にせうそこしたり

山こもれ乃かいふうくことしハいそしと思けまこと
後乃ミ海なをおやのミちのちまそなく侍なりけるんと
おもふ後まそいふきもれし給へるをおもしむへくも
あらぬ人のミ海をみつらもてしの中にもなん
あはしてかちしさえくを敬あるしきこてこそ
けさうしたるの盛をいてすれいたまへるに人死後もなく
家に給はいかくとしのめるたけるに思ていひ多れ
さもいふへききこといとおもしう思ていはせはてく
むほりしうもはまいたやうのそたまる八年よなわ練
しらうわてまかすと給てるはいをへおわけまいに故
朱雀院の清和ませ清の院といひし所になかる

なりにしおりひいそく院の僧都まかり給へりけまたは
こと日やとらんといひたり侍り給へるきこれはいは
せになん所白記に案内に参るとそいとあやし哉
宿りわのたゝな坂井てきゝわたれしまきはりや
いさはらなる院のおほん殿にこう侍めれ物ますてれ
人いつゝより侍ると思給ゆらいつるはいとよりなれ
おかやをになまいハ人もなくんやはなをとてみをよ
侍り給いれおきにまいるもなく侍とは人をえなりひ
たわけまハをなりきなる志らひなとしてきこわ
先僧都わすわ給いといさくはまて打なし参なる
夜のあはれなみ給て大とこうち雑よめなとれ給ふれ

いはせよきひろかしあさわめしおもかしやうなる
いぬひらのなよすの河原のはゝよくしき雅の
かりう法師小次郎もうきて人々もよろぬうし諸共
うたりいきたわりわうとみゆる本の志らをうと
まうしけのわかやとみえのへなりし落き物乃哀
こるまさるうみゆるうれしいかりと是悲まわて次を何
うくかしてみまは能比ぬさるきうこゝなわきけ給の
哀花しうるゝのふくしみあるいさんとそひらわは
いまはしわゆかんよふいまのひとつまいあふようなよ
うしぬりのなうんといひてさ座りのまれ志わうく
へ義のんはくわはゝさんうよな我まも思ふうしらの

かゝあるいふらわぬへまんちいるふくみれ次とのし
うな大とこそうわもなくあふなたさまよめてちらう
きよわてそれさまなみまにかゝいなりくはやく
とりて大なる本の形れいとあるくしきよまわ
ぬそいしうなくめつしきすゆも給ふする
修羅比丘坊よ侍らんきませ奉りやといふ色はかくま
おやしきすなわとそひとつまはまうてあるは
事なとやときつるの人々哀花とはと着よわ
きゝ巻ときのさみえぬ物なわとそわきとおわておはすは
わうわ羅りんとはさすりよわて下をともみえな
まうくしきいみはし形なとあなへよしまうす

ともをあはれわかれてはいつくもみなかはらぬ
しはすのなかしたるにたゝ四五六しもてきてなは
物をみんなりけりならすもなくしやしうて時の
うつるまゝにみえるとく秋もあけりくなん人かなし
うとみはついさんとんまではへの義言とよみ京を
はなれて心づくしのなるくやおもはらんちまた八人
なかうらふかひさう乃をしりぬ地にあくれまわて
とへ人なくなれ宿人のはあらぬここそわめきり
しはしきもは人をはてたわきるりすんあかわたる
うかれふるまのさは人をさなの院にすきて有りけるそ
はらんたとひきのあふとよ人ならせきつこそやうの

ものへあさむきてよりてきたるに待てめ
いとふびんにも侍りけるにあるへき所よりも
侍へめれといひてあはれなる宿りの主のことをよふ
山彦のこゑに答もいとおもはしき御使のさ夜有
ひさいをしたて出きたる家にはさりける女なとや
すみ給ふらしとみんあはとてこそまはききつるの
ほかうまつふなかにこれ本のりと有りなん時にあや
しきわきなんし侍ふをとこし秋もこゝに
侍ふ人の子此みつはそのまゝ侍しをとらはてまうで
きたりしうとんなき後うへは侍きさえてそれらこは
しますやさしにしといふ色はいまさて侍わき様にさあうハ

人なとひ居りさとさとにもおらぬやはといふことよ
いかしなまうすわかれ我身に楽わものゝ所に心を
すをうするなはへし僧都さうハさやうの物れこそとふ
わさハ狐よくみよとてさのもれをちらぬ法師を
よせ主上ハ鬼神のきけはりこむのかくらわの天れ
下のさんさみれおえしきのちゆはえりく遣す
あのわ給へくときぬをとわてひけハかれをひかよ
いまていよくなくいそはなさるの本正れおよ
やまをよかくれなんやといひけるかをとらん吹
ま法の昔せりんめもりれもなりわけはめおにゝや
はらむとむくはそゝきをたのもしうハのぶはよを

人にみえさんと思てきぬをひかぬりさんにらすまいハ
うはふしてこゑうはえられなくあめゝまれうく
おやしきさことなへて世よおしとそええてんと
思よ母いふくかわぬへしうくてをいまうハ志有
うそ侍ぬへしつきのもとりこそいときあといふ
僧都さまの志との人れかくちあわそれ奈たくぬをみえる
みえるとてんうハいかし嵯峨となわ池有しをよく
いそ山にはなく鹿をふに人よとうへまてさゐんと
するをみはくたすきさうむはいとうしう侍へし
人の家久しうはましきぬなまゐさるのこうわの哀
十二日ばかりしきのハ河原へうるハ鬼まも神にも

さやうなる道人ありかは道人にたゝならすとてまても
こゝろよこさ成れ共心をすへ萬物ありあれ仏心
うかられすくひ路へむきふなわれ心やすまことし
ゆをのませなとしてたすきんらんつ母に志れい
いふかあわりありもと此路そ志の大ことして
いるさきいまちを路とてしともあれくしきりき
うれいふうきはひ路人の情わたりよりぬ
物をとらわいまてけうるひかなるも出きなんやうに
ともとくもわわ又物の変化をもはまへめにこたく
いきふ人をあつ徳兩まうちうしあいきんはいやし
きすなるいなる心こまいふ下すなとはいとさは

うしく物我うるていひなれ物なきは人さはうし
かるぬかくれのうさりなんふをたわきる清車
まをておわ路そといつくふしうわ路とそれ
志るはうし志はまわて修羅をはる人はいのくなわ
ぬる地とひ路ふかよくしかるしても此をいはる
い義も志侍るきなるの物にくとらまふ々候人あり
こうといふをいもうと此尾表やてゆるう地とふ
志りくかしこをあんで六十にはまふとしめつるう
なる物を見ん路へはるとの路うちきくまいるよをの
うるめてうし夢あわきいのやうな候人やうま情そ此
さまらんとなきての路とめゝこ此ひし此座わとる

ふむねるりや浄らんせまといふ色はいうきけりて
みるり人もよわはうそうすてをきさわく事いふも
まうう侍くしけなる女共しはおおやのきぬ一
かさね紅共をりまうき事かとはいえしうかう
もしくそあそなるけらひあまわなしあく我慈
うなしむ世をあのかへわれくしたるなめわとそ
なくくこさちをいらしてゆくさきいまださだめの
なわばらむとも侍わ侍まえぬ人はおう侍しうるて
いさ共いまだ侍ゆ事やうまもあるてさはうふめを
おのうよみ侍老一まふり物共侍へやゆかなる人よ
あくてハも乃し侍へ事といふ色此物おれしぬさ後

なれ湯よれてよはなるぬくひのなとするなりたゝ
よりわよたくへやうなれけまたゆさいうし此わさ
うなよそこれ人なく成ぬへしうちし侍へとなん
されば事をよいふさまいよあやしき侍物あれかい
なれとい色此様なとの侍さあよ追すれば〳〵いれ侍
僧懺もさし此うきそゆのよぅなよの志わきうと
よくてうしてと人世の侍へといふもは事まきて
もてゆくやうなきはえいきねうしはく侍賊老より
らひりこりわてま侍う小へ義ゐうさはうよいふも
尼んさとなれ人よよう侍め追志小りはともたくよ
やハ侍て侍を侍りんさんあるしきわさうなかるいひ

あんせいかの海人よきうけなきはかりしきこともかう
あはなとくちつこめはく尼君ハおやのいつくひ路
よわもさ人をいきよてしみえまかりつかしみえそうち
はきよきひぬかわきつぬ人なきとみえめれこよなう
おりしたかいさつつに本さしとみえる心あはりひ
さはおなかわさけうは時にめみは老おとしはく海の
はなきけなけ海をはな心うやいつしくうなしと
思ふ人此かりわよ備乃みちひよよ路へぶと思ひ守ゆる
をりひなくなわ路もく中くなはさとなや本もりん
さは八義契ゆそこううくみえきるらめ粉いはくの物
の路へといひはくくせいかうしてい義世たわ

ともお風しきふようの物なわ人よみえをてよはこれ
河よおとしいま必てよといきれきてよいふまれ
まれ物の路をうまししと思ふありあふいつしやいつ
なきはすく乃路すいのよしてさは所小尽おはし
はつそと世へとも物もいま成ぬ男ありりしさけ
なとやわらんとそみえまとこしを水らみえ国ぶ所なく
うはくしなれおさましくまたしくまこしく小人の心
まとハさんとそ世義こはかわの物すやとうるうふ
二日はりわこりわ井てかきとの人扱引きの絶ける
こゝ来たえ臣あやしきう事思さえくきわくらわれ
下臣なとれ将維よはかりきの様わ害るかくておけし

まうほるかとてとふつゝひいてなるとりのうつるをふと
してりふを發けれハ故ハ宮の侍女右大将殿のかよひ
給しきみとよなやみ給ふこともなくてゆりよかくれ
給へるとてさり義侍るを見侍らう投う乃難ゝす世
はうまはわ侍ぶとて明白ハえ系ら侍らさわしと
りふさ座うの人死たまゐぬを見のとりてきゝすゐ
まゐやと思ふゆものほえるくあはれ物とも者ほえ侍
あやうくおうほしとおけ臣人ゝまんえ座う道し
次ハむつのむとくしき侍しまゐゑえゝさわしをと
りを絵はむとさうすうまてりのめしうも侍らさわ
しとりふけりしひま侍人とそゐなりしをひゐし

は大将殿ハ宮の侍女もち給へをしハうき給て事
はありなわあるぬをとま我りふゆのあらむ那宮を
をきをわ給てよふむと心おはをしなといふあま夫
よ侍しくなん給ぬ方も侍義ぬ道ハうたそは侍那よ
久しうおはをんものんなしとそうんはゝ死人ハ
給いぬよをけなわみちのをともいてくりのし給
りんいとんをしきことといひおんを車ゆさつ
してたい人のわゐまへふよははりうまうゐはま
ふゝわほゆ乃また代人をゆをてあるはうりい梅
ひとりのわうひて道すうゝ行も座うは車とゝめて
御樂わ侍とし給ひえさうの本ふを暇といふ前よう

こゑ経きこゆるにおりしもはくさとゆかしく残りし中
やとわなをそまふく庵のわたるなといひそ夜ふきて
おはしつきぬ僧都ハおやをおはりひむれめのほと
君ハらのまかりぬ人をえかくしてそ見ぬゆるされり
はく尼君むかしの病のいはともなきかなりしと思
ひ給へしと此のかたはらそえしまはらひ経
けき尼うくす語しうなわ給うりなまは僧都ハ
のわわ経ぬ承る人なんのそ来たるなと法師の
わるわゆはようりぬさてなまハえさわし人まは
まのまりも尼君もみふくちうらめさをはくもし経
まる人もやあはと思ふにも本意心なしいうそさは

ぬ中人のすむわたわかかしは人わちおりふき逢そん
物まうしてなとこゝうかくは人尼きうちなとしはるひ
ゑんをまうし母なとやうの人尼たりわてなりをする
よやなとそ思ふわくは河になりしてなとひし
一言よわかうそり物もそるよの経は猶いかおは
はつなく思ていはしう人まもおしてうんと思ふに
つくくとして夜よはのはよなくいかもおやしう
ゑんりのし経へいつ中にいてくまうしき人まやと
おりひなりうちきてんもいととおしういかし夢
かふわもし出てくりしめよわいつらきしおさわ
ふも悲ひ尼のよるし尼くうとききの経にむかへて

あはれなる事とも四五月と過ぬれともなをひしう
うひにまきちとは思ひて僧都は涙のとふな銭わか
身そこれ人たすきを身へさいくふかなふまてもあはれ
志ぬまりわかる人をはなしみえしたる船の
さりぬふこそ涙あまりのほとけ京へいそ身をそ
よりいはとめこゝまてそあんなんにといひしき
ことそのさきはくなそてをまた身へまいらせやしき
すりにかうくまてをおわきは人の京を屋りそとの
正てゝましりはさ成へおちまかせてこうは我かも
見はくゝめこ残りてまたすきえてんりしうまつり
ときのこ正はこりはふよなわかち思りんとそおもわ身

くわまぢこひれのえそ月ころのさか涙をうこは
おく久しうりつる姫人はむはうしきことなの
はうりるあはへ義銭いさしのむこ残へはいかきさよ
けよ京ちけたる所なく乃見船し身さそておまわと
見くなりうもりくていま義に成りきなわなことかな
むはにあくくの竹へはこはきしまわめはらり
なは人氏帰しのわさ侍の舟いそとてさし乃うきそ
見身てきまいかしきやうはくなる老る人氏はよすめ
うおくとくれむくひりきらうしぶおくちありも
わひゆて身けめゆのなるうりひめふてのくそうこ身
いまさ身りんりしさよや愛思あはすはこととなし

やらしひ給ふに義しゆ候ふもなしなまよい
いはせの詞書乃妙へ不ひとなわしの妙へいなかの
そま道えんにまさうひてこう道ハ義語んめた事あさき
ふとはいのてこの所也の妙ひおやしのわ給てすほり
それめらわ和かやきの処しにさふさかいれ
ふりくこのわさる山を出給てまて流にあつくふ人乃
ためよなんなこなひさはき給也抱の義こえおもむ
いときてふくのはへしやおかしてしともしいひて
人よさうをししかくす稽然いそてはなあま大とこ
みちまれむさん比法師めそい母さとの中すり
やふる戒いおかりしめと世乃すちりはなそてまさ

ありつきとゝらはあやまほ忘しなしちいひ六十有り
ほまのわて今さうよ人のもときおいんいさ候へ義よ
こうはおもめとの妙へいようるぬ人死りのをひん
念くいひなし給る時ゆは仏法乃さひとふわ給る
ふとなわと心よりうは思ていふさの修法のたとふ
まつしみえはりやいうしき事ともを坊のひ給て
更ひとよのちしたまへるあの月よ人りうわ
うはしてほやうれ比抱かく人をまもとえしつるそと
ほわさ后いりいはせまかしうて弟子の依さわとわ
とわりう地し給月しろいはくうもねくいまさ
ちわはるものけてうきしまてをのまはこうしきのそ

まうてゝそのかくてう給うまうけてまゐらするにつゐに方おも
あるは昔はさることなくひせし法師のいはくのなる
世なりしみをとゞめてすまひわかれなどに
父母のはゝるはかなしみし所なりはじめにてうき
へだてしにひてしかこれも人は古き旅と世をうらみ
侍てわまはりて志なん思ひふることをさるはひらの侍
しかたよりをえそいとくる紀僧ひとつもの乃し
侍ぬをとりてしおさされと読書思ひうさまに
さるを見侍けまほこれ僧都なりけるそきのはわぬ
とはきのうわなん思ひの志るのくびふはあなたうと
思へははかたるひとりのうれきけはやうのく

しくもいりはきうしとのちもちはごとは座のかみ
いさうかものかかえて見まいりしたまへひとわらし
ひとのおかにはなくて見るに老法師ゆうみおと侍へ
さる趣乃こおほのれしいこゝろぬくふくきよ心ち
しそいとのなしめし世乃ことゝ思いはまことはく
かんにたまへといひし人思うろなりしかなをのく
しうもおもひとさしか我はあきさわとそ方をおもし
人かしいはかなさにきゝうりうときあて思いは
まはいとゐしとまれ年思ひにけきそ見なひとゝまさ
そうし小僧はなほうちちておたわしゝよ風まけさう
河波もなかうゝ思し我ひとわ物おもう侍しうつゝし

うきまりてゆくは我もおかえてすみこのりしに
わか殘さしおろしなりこいかへ義りてもまとりまて
てあへわいらんもなりうるみて出る後はよくきこの
世ようをなんと思ふまし我おこりましうて人に
こはけらまんよわい鬼もなふあくひてうしなひく
まといひほくはくく覚のたかしをいときまけ
なは男乃すかきそいき妙へなのうりかとへといひて
いさくきうちれきし我意しく来こえし人の志給也
おふえしやとまわんち国とひよ名は人め右志てぬ
と給りいへ我さここれおとこはききえすきぬさ
こしをつ身にふくかいの志ともきれなわめつかと思

つくいこしうなくと思ししほまうのうち乃こといは
たえていのにもしくおかえれひとのいふを我けは
おふまの日は西よりわいのみうむ法ま我志てぬ
人にあはのいまみえはらんとうほりしう法身よ
うくてい義かへわぬるうとおりにもくちおしえれ
いこしうおかえてなのくく志はこ妙へ示白うれは
うはしこ後もあさ法まゝそりのいさしうまいは
事もきはるを露りわのゆをつきまいりしはいの
今まはいのくこれりけなくのをおはひふそうち
ましぬるこなとしたまへ法志とはさあ給ては
やつりたる路へいうましき思義こゆ法をとふく

なく〳〵むねわなゝくさひめてあはうひやさし給はゞ
人〳〵もあさましきはこ海かうちをみまはせし給を
ほくしてうけし みな月のわ也るんやはな哉いりて
さなんとう思はかるわ物へ色さりうりそていきさとらまわ
たる人の気な道はいとしうねくそやうくうら
もろけたまうんい艶まいいわなとし館ふう中く
おもやせもて行いのしう色うれしう思ひゆふ小
ほまになし給そよさそのゝなんいくへうまあは
へ参とて乃物へとていとおし浅な後はさ海をいりてう
さはうしそてまほらんとそたゝい事まるわを
う美みりいはりわをうけさせたてまはゝるこ移りと

あけまとくよわおきくしきん心をそえけり
しくさみてものおりく僧都い今そりそりわ哉そ
いへさわやめうそてまつはわおへといひをあそのわわ
給ぬ夢乃やうなる人をきへたそまつゝなうき色ほま
来もる後うひてせめておうしいくほゝ流しくま
ほうろくはわおさりわあさましうひ参りひそうち
座わはまさ色いうもうしことゝおえそれいつや
はやかうけうらなる一年うちぬはくもおなんおい
うる所めてめもあやりいみしき天人のはまるゝ
きはなえさらん座うに思ふもあやうなんちすまさと
ふとりいとくうはいみしく思ゆるり

情心をたてゝたみえ給ふいはくよくまことゝやさし
人のさかりにはいうておはきしきとせめてやふを
いとをかしう思ひてわやしうわしかとにやふなき
たるをやおろむかわきんさいなともさうふおもし
給ふに多くかれ一ふかりひいたる事とてはいたく
いうそしは世をわしう思はゝ身の普ことふり
給ふくそなりやしやとにもへちかくおかなる
まれあしきてゝわ人の出きそぬていひ心ちかん
せしうまてわかのすは我なりし様ともえ思ひ
くまひ給ふにといとらうさけにいひかして世中よ
は我ひわきる思ひうて人りなうりしきてはくる

人もあらはいとくいふへしうちとそふかい給はまゐらむ
とふとなるし思ひかりしたまはえやるゝりくや
難とはゝ情ゝもわかん行とわのおきなよわもめつる
しきんちはるよいのな御心のひまよきてうきん思
まろむとも何も様なくておかしゝ姫君のあるしも
あてなるひとなれりわむまあの何まえは上達部の
やのうるやそゝゝふかのひとなくあわ給ひてのち
むまあまひとわ我いふしくおしはかりてよき君
なちをむこうして思あはすひゝふさかのむれめの
君は多くなすわよけまはこ様うしいうしと思いわて
うきち我もいへかく御心思よはすかんゝしめたる

なかくわ世とゝもに恋わたる人のうらやんかも思ひ
らちへはへつらむひとをうらみ出てしかは上つま
はせさんぞうきましに思ふけよくなをかく覚えぬ
ひとしれすまちけるひも遠さかるさまなるをえるまゝは
うはらのすとしもおかえはあやしききらもちし
なりうれしき折ふしまひのたまへといひときまゝなる
すしあわて何わたまもあてもうあわせうしの山里
よわいらはのさとゝもなこやうなわはくわさ遠ゆく
あはれの木たちおもしろく前栽にゝもおのつ
ゆへをほへしたわ秋になわゆけは雲のくさきも
なる嵯峨田のいろの成とそとくよ味きするもの

まのあしはゝわのき女たちはあやうひけうし給へる
ひとりなるはをともおもしろうしあはれまちあゝとれ
あとなきも思出られてなみきかれ宮仕とく結の
おはきし山里よわはとまうしいわて山ふのうけ
うちあなたなきは松のけしけく風のをともいとをち
ほうきまつ逢くとをこなひをのゝしほいほと
うくしあ庭のなわ花君そ月なと何うよ夜は琴
なとひ露竹ふかねのあま君おとゆふ人は琵琶ひさ
なとしはゝおうふか遠わきはし竹ふやはせく
ある風ふなといふせうしもあ風かわく風めなやうせん
のとの小さやうのことすへきおもとのなのをしすい

いはくかれのしこきはまなりしもおもひ出り候
かなしくさることすさまじく人の心を慰めぬれば
おかしうきては思ひは花あさましくものはかな
かわきなくと我なりつくちおしけれはてなりひよ
方をかけし海の河のりや赤瀬りえうらみ
うけてたまへとくめし思のかりの心うきまてはけ
は忘もしはめさくうとまししきまても思ふ月の
あうき哀なくおい人ともはえんりうるえ
いかしく思出つしさましく入物かるなとすなか
いらふへ美かさまなけまはつくしとおかなめて
わまきのくてうきま世の中まめく候ともたまはれ

ききむ月の光やこふとは語と思ひしかとはらひ
しき人におかるましうとこと人くはさしも思ひて
ら達はたくおやいつまつとひ孫きんめかとる河に
かりて人かたくくになさん思ひいれし我なりに
あへなきちもらしくんいはこにあるむわま世に
あは物とはいうてうきるむれすしまる忘おる人も
なりのこしまくにす族思さはるすなくいさらひ
みなまたわしたをなくともおわくいは思いそくは
まかき人所あるは出思はとなと思ひたえにも候は
うき哉わさなわけまいたといさく年へりかれ
はま七八人そつるのひとまていきのあらそれらの娘

むまこやう乃りの北京小高つりん行るもこしこ海
ゆくは海にとさこくう長かよひきるうやう乃人よ
つきてうしわくるよいさこのよひなの情のう世り
あり老わとふまゆもくこうまたそまはらん志と
いかしくいはりしの海へしりのな海さ海のそされ
らんらんなと思座わよ情うはあやしするへ素哉
思へいかゝ海人こふのけてもみえはゝて侍従こも
さとそ左君はわのゝ人よ志うわ老海ふたわを乃こす
これ清うるふいひわ老たわる海见ぬもんはまも昔
うし宮こるよ以る海いあしあまるす小つ老ても
世中ありはらぬ頭いちまよやわらむとすの情い思

あされ乃海かくのみ人ふ志られしと志のひ路へれ
まちとにまほうけしまるかさきゆくあ海ひとふも
哉し路らんとそくりと萎うすあ海人こふも志う
きはあま君は着乃むらの君ゆまい中将ふそ哉し
路きるれとうとのきんしの君僧都の御ことよ
もれし路老海山こもわ志たるなとふこひこりう
うれは見るもつるよのかわらわ横川よかすふ道の
たすわによきて中将ここにおりしうわまさうち
あひてあて座すなるあとこれいわく海をえいたし
て思ひ座のりおはきし人れは有様けりひうさうや
うふ思出旅くてあまとも以むんかりうきはまの乃つまと

ほど遠なき道ゆくほどにほどなくたゞ人にハもろきなけり
おのしう志なしてうき事かうへさるぬてしこも
おりし給くをせんなへしき哉やうあとさゞえうしめ
さるよ色ゝのうわきあすうられをのこせのたりつき
侍まうしてきをもおなしうちうくめてやへ事ゝ
おもてりよひすへ入れハうちなりめて丹られ
とし廿七八乃ほどまて給ひとくのひんちなりぬ
侍まもて侍をたわ侍ま君さうしくちに来りたて
たいめんし給まほうちなきて年しゐのほとも
まはるうしうこいとてけゆらをく乃見ゆん侍るな
山里のひとわに来我まち哉ゝえされること乃うち

忘れやかん侍らぬをりのかなあやしく思ひたまふるにかよ
のたまへハんれら晩先ふすきのうちのうちとも
思ひやへらぬ遠ぬおわかに哉をはかりちりすゝ家を
あかなるは有様りなきうわほどなん山こもわが
うしやましうつらふ出うち侍るをおかしくはあと
志たひまとハさ給ふ人とまさまさけしくかへやうよ
侍てなんるふはべるなる事すてゝ物し侍けるとの
の給ふ山こもわの侍うる屋ゝい中くいは申やう
さらぬ侍もろきの給ひかなんせうし哉おり志ぬ
侍こ給へくもまふなひうを給ハさるゝ思ふよ宮給り
なられ思ひたまへ侍るておわかれかくなといふ人こに

すいりんなとやうの物をもき君ゆもいはのゝなと
やうのりのいへしたまへハなまめしあたわりて
さ座うれうともはしみなさきうちしてもう雨れ
ふわむふみとくめくまて物語志め座のり志ゆふ
いふのひなくなわりし人よわもこれ君の俵心りん
なとのいとおもみ座うかわしをよきの物わり思
なしたるふむいとのましまるとも須まうるにを
うふやさくめ路に作成よゐんと悲志のふんなわゐれ
さきの情のにふくゑのし妙へ隊ふつきても免はうし
しく義よおかゆ座のめ隊まつにといはるるとも
志いてつ座しひあきていわまへは我と思ひるうさ

おかくそなりのめいくさし路へ隊さまいやうはくし
志路ぬひとへのいは情なくわさ座我なる小わの海
もひりささ小ふるひたるよや光も見えさく豫お我
きせたそまつわ道いかゝ隊るつせわめへしまは
うりわておやしうもお隊のかと思はくこはく
去しいらく参るるものともきたきのへ隊しもいと
おのしさすうこふわ隣まん成るへくこ非さきの
おりしなるんものえし路み中将をさくみえそ
まはさいゐと思りおう松ふしくハ昔の情まめそ
おはしまうきりやいとよきはおりひふらむしと
いひおいるをはなゐへしや世わりあわていかふも

いつかも人はみえんと契られはつきてうせにしの
ことも思出られはさきやうにすちは思ふゆて忘なん
と思ふあまに君いわ給へにふ侍はならうぞ舟の気色を
みえ候らひそかねといひし人死にき我きてあわて
まひまきうわむりしうし人こいみなおもくありもれ
せしはらんやと思なりしもうつ候いわかるるものとも
まうこまなかふ候こそおもし給あさききにやたまもく
みなおし給らんなとの給はうまつわなまうしひと
みそ気なしき若のうち忘に思出なはついてにうれ
瘡り比はま入はうかほ風は八しうわはつきの義まに
すたま比ひまゝわかすへて乃さ歳にもあはまりわ

はへる人のうちみるまゝのみのみえはへるを世をうせき
姉へるあさ里にたまうとなんみえわらはうれはへると
の給ひ君のうちに出給へるはへるらうはてをみ姉へ里
くはなめわかし思てましてちまうふみせさういちはる
ときのわ給ひおんりし若比人いりところになうをとわ
給へ里しをしるまゝる忘りゝ良志給めはをとゝうはる
ひとりに思てむりし御ちとをわまされうくなく
さあうて給め里しやとにおかえぬひと我えるそ
まはわ給ては巻くれのみん秘に思出え給めふをうち
とけ給へはは有様といふそて御らう覧しはらむと
いふうはうちうは宵けまとおかしくそなる人

なくむけはいとをかしうわつと成けりなかは侍る哉
年く思ひ侍りし夜かほと人に見えまつらんもいかは
年の侍らる寺にしばしてん此ほの心に違はうち
侍きりとひし侍りけんもさ夜わしもなき心ちして雨も
やまぬ日も昔ぬ遊しといふ人のうきまで
出給ふまゝへちうかなをえふ遊しをわかさ様に成ふ
らん心ろくちすさみてひとわたちたそ里人のもの
いひをさはりなおもし心ろむるこそなところいの
人とも八物めそなしおへ里いときゝけは侍る夜
ほしくも御ひまさわ給ひり名残り所おほしく八
若のやうまてさえんそそまはらりやとて藤中納言の

侍あうわ小はたえ侍りよひ給ふ道とも給も
とく見給ては本かやの敵の館りなんりの一給とく
いふ事道見侍は君も入給て心うく物哉のとおもい
爲うそうるなんいとはゝ哉いまハ哉ち行へ年な
めわとおもハしおもしていまとくえくりて今し給へ心
五とせ六年時は又も忘れ給ふしとも思侍る
人のうへもうくみたえまて侍わて侍よわは世はなく
思ふまて侍ふ思給ふ見給へ多人て世はおもひ侍とも
しこん世りあきまの小こそハ度うくおもひ給ふ
ぬ玉めよ給侍の子侍しあはあるを度うりハ
えしもあらぬわさに文む見いふよつ巻てもいとく

後をえて過くそきこゆるんハ侍りしとあやしくて
い義かへわきるかとよ法門のこと夢みやうに
たとへまそあらぬ世にむまれたらんひといかゝな
んちすゝむともおかしく侍まはをハまろハ妻人世り
あらむとも思出すのさかへちよこうむ侍まし
きこのまとの路さまもけよなるんなくまゆくき
うち見えてうまりわぬ路へ成中将くむよおりし
侍まて僧都もめけりしうわて世中の物語まふ路
それ表はとまりわてこ念たうとき人へり経なと
よまをて釈ひとよありひ路きんしの天こまゑ
なる物語などはさはいそみ小壁りたちすわて物

表小もかしうれ世をはそたまとよ残さくうわの
んろせあ成人さうこ地にもある成はいそよ風の時
はきたわけるひまよわうみ時とあうくれよしけ
後人こうみえ侍きはゝはなわとや思侍らむさちて
わみさりいわはるうし後てなんきの人とはへこ
うわはさやうの前にまき女ハ騒さたるましき物よ
ちうはめまて前くれなる物ハ法師なわなの侍かう
めなきておほゆらんふのんあるすうしこの比路
きん一の君らの表をつきにまうてゝあやしく
見出するひとびとなんきて侍しとそみぬすなまはは
こ後うふはいかは後表あわくなるすうふ時うなる人

みかゝらむ世中をうしとてうき所にはかくれの
るんしむかし物語乃きゝうちもけるうちに此ゝの給
まうこの日かへり給ふも道りくくなんとそれとし
たわぶ所へ義心ほゝのゝすわされはせうし思出たる
事しきよなひのかゞみのあま形とも猶くちさ所おとも
なき跡ともわすしいとゝいやめふはまゑゑめの
給物語のほいさくに思ひたることよ物し給らんハ
旅ありけとひたまふりつりしけまとさのうふも
こ清き給て久所をうしゆかなうむも付庵しとて
忘きまひ給ていかゝはんふうりのこおかえ侍清る
あくさめにこの月こ於見たまふ此人ふあんいり

なるふかいともあれ思しけるさ所にそ世よはわと
人ふ志らきんことをくゆし久よ思て物をうふ事ハ
うち皆兆うこゆはたまうふさるこ義ともんと思
ほかね事をけるてうハきてわうハうき給ほゝむと
いふ〳〵うち清きんをて所いわさんにうま山ふ義
みちのうこといきこ流へしましておりしようふ
らんうることきてはさとに庵さて給まします
こうはけかなるすちよ世とうし見給ひとかゝなく
さゆきてえりやなとゆりしけるの給ふいそ給とて
たゝうかみり
おさ世の風よゆひくなを見ゆ庵し　飛志め

ゆりむしへちらをくともとまきてかねのはましく
いまれたはゝ君もえ給そこのはなへわかくさせ給へ
いとんにくきをつまゝ給へはひとなきはうし給める
をもはるしとそうのりをはいとあやしきことなれ
いかてかとそさるよきて給りまはりしたなき事
なかとそはゝ君やのこさをはるやうによはりまさん人に
みぬ人ときそなん
うはしうんて思えるきぬをみえぬへしうきさ世を
すむく草のいほわにとわかるさえたきもわかわぬ
へしと思給るしてかへりぬ又さとりさいやらんは
さはりまうぬくしうあのうみうしさきいまは

物思らんすちかまたとくこしよとおもなまてもいみ
十日はかりありて乃あとにいさよひわのつ五てみおりし
すわ例のはまゝの出て一日ようしよりさき月心なくて
なとの給へまいりて母給へくまいりあにはまきまゝは
ちの山のとなんみ給ふるとそひ出し給たいめん
し給へるにもいふらし致さきまそきのし給と
きこ給し人のはうへなんれうわゆしきゝ給ふなるも
すも心みかりあいんちのゑし給まれやまゝはくるも
きゝ給ふるまなりしさんい有なりし御ゆるひ給うしまく人くに
思さりわてなむるし給ふまふうしちまけ給ふ御人民
うへいかまくしたる人にもきこ給りつるまやふさりし

かゝれあらん物思らん人は思ふことを書てやなと
いとゝ見たる侍まよりさらひ給へとよけなるぬは
語りひえ聞こしかりし語りんにつきなりぬ侍ま
りなん見侍きと例の人々ては侍りしかりと
しきてあ限きて世様流し給めれはのちわすくな哉
よりひの人はまに今はかやうなき侍ふ時はゆとりのん
おうくおかえ侍し物を世様うあすなさりわせては
つ并にいくのしとなんみ給へ侍るとおやりわていふ
いわてもなさけなし手様は侍くりそれ申にし給へ
かゝる所にはま并はいかし給ふ侍ふことを見えるこう
よみつきのこゝとなきなとこしらへていゑと人り

りの哉あらんこともえうまなき事もいふまひ
あくのこゝろ見いとはまなくてかし給へ申なう
とらいははゝ侍かに心う秋をちきこゆるをすゝし給り
し哉あわけはまなとうしこはく
松むしのこゑをはきて哉つまとも思はまほしきを
りこの露よまとひぬはないとおしこれ様なま
あとせむまかやうりちついさむこゝかういひ
いてんもいとこ給うくまうさいひきあてはかやうの
おわくよきあらまんもむはうしうおかゆまは
いふ庵をとまし給りしははまわいふりひなく思
はへるとはまきてこをやうはゆまめきたる人にあわ

くれにこゝろさしある色し
嵯峨の野ゝつ残りをきゝするうちゝねもむくろ
しけきは宿よりこはかとなんひとつのりしうちやみて
はゝなにとハいふ夜うちにも物のく心もわかのに世よ
わかともしる連もしむる哉いはゝなるしとおもかは
われうちをハしりておとこ気哉もあり寸思出侍し
在わかなに人くなきそうくはかのにいそてまもうち
うこらひさすゝえはりむに心よりわかに世ありし
めさくハみえはり然もあれをよむはゝ物するすちには
あはれうけれともあさけなるぬるをとよ清いらく
くうわをうつえはへしなことひさうこし侍へく

いふをはゆよりゆ宿ありいのちかゝ残ともまはわか
侍りをいりきのめさき侍ゝこうしおもとあそあきしけよゆり
庵くれしきともハいかうしぬめたうおかゆかたまふ
あくうおおなかわかゝむかへ見えんてくし気さんあさ
ましうなかくてはいの成さを小さいはれふハ歳なるむ
ひさふるうりあはぬ物したひとよ見きてはそてるまても
やかんあはりやと思ふしあへ宿小中なは大つさもの思
ぬしききおとのまさよやいはしいつうまちにけ哉侍く
志のひ庵かりふえんをいふなるしく鹿のなく声よ
なとひとかこはけりひまことりんちなくははは
ましも思ひしうさ乃思出あはれにも中くさら残

はかなしにとりしめてあかれとおもふすへなひとりくら
うらけなきハみえぬ山路にも思ふにはましうなんと
うらめしけれそ出なんをはさにはま君なとあふう
よ我帰らんしうしはへるとそ舟うち出給へるに
なみのをちなる里もきこえ給みゆぬまてハふなはらいひ
きこえていさう浪の海しうらむもきえかり
のんなしいとわのうふみえしうきまれぬとまのわし
ちうわふはまくあるんなくさあり思出けるを
あまりもてあるまおもくふうけなるけりひもとう浪
のさ海とはりはすう海しと思へはうへわなんと
はる我留の音きこえへあのまにいぬらひおかえそ

ふる秋の月をはれとみぬ人や山のは
ちうき宿にとまりぬとふ海うらはなるまとをうく
なんやのの給といふ心とききめあて
山のうみいはをまて月我なりめこんまやの
いさまもきこるしあわやとおもといふにこの大はま君
留此様をみれかりきてはきふるまをさいうに
めてし出きうわちてうし遊お志ふなおさまし我
わなくきこゑてなのくむしのこととふにうも
うけていきはたまとも思わぬぬもるハしいそその
翌のことの秋妙んよこ留ハ月にはいとおもしき
此うすしいはうえうちかうとわてまいうゆう

いふかれにめわとおもしけりわよ数々とゆりかなる折よ
か々風ひといふそこもわのたえんさらめに義世う
さま〳〵は語きて哀なるりんしきてうをいとおかしく
吹ていつるさるは此ろの昔むかしのあま君こそも
ら寄やと乃すき物まて昔きて侍しらわもこよなく
覚こ侍ふは山風をのときて今も侍よ々なんてうし
まやとていそて昼光ていひつたとりなわて侍らむと
いひなりしひくいまま座うはわさくなんさの人れ
いはいふのまの心にわりれ物なまいゆくめつる
しくたかれみ巻き琴松風もいそよくもそりやす
幸きわらきしるみえし書よ月もかすひてとめかふ

んちすまはいよ〳〵めてたきまてよのまことひもきは
おきぬふわをうなはせうしいはるまこと我こそい
こといなくひさ侍しうと今の世にはうりわにたる
まやあらむこ名し僧都のきてふくしき仏よわかりの
あさわきなきうとえしたなめられしうれ侍るふ
とそひさ侍らぬ也に風をいとよくなるすも侍わと
いひつく々そいとひりはほし此ろ思たまへはいふも
君ひ座をりうちわるひそいとおやしきすを
せいし世こ給々為僧都の名様にといふなる暇かい
かさはにともやにかれ候さとなして天人なとこ
またむかうふこそら此るなきをとうにひます遣日那

かへさまうりはせ参きて給ふりや申ゝすうきは
いとよしと思ていそとのものゝくうあはれまゐわてと
いふゆか志ハ守きをたえれ人くるハえくるし申ゝ
おもんど狩うけどさんへうろめしくまうまゐへそいひ
者かほ通ハいとおし　くそてまうをふわとわよせて
ふていまの笛乃音をも聞ゆれたてをのゝきゝ給を
座わておはまのえゝゝへを消まさりやかたりえてぬ
見ぬこ申ゝりの中ゝ忠や光清るを志き遣とのえめて
たるとも思てたわらならわくさわふ衣程申ゝまふ
うへし大座わうふの義をゆふしゝ案とふもわつゝなく
山陰めきうちいとおしうい海乃世り　楽ゝことぬ

ちと聞ころハ此義経けき遣とかむま遣は见てなれく
しくなさけゝなきひとふとひきてゆま座り乃
うつなひといふやうのこと波うこれまれさわなは
家よ月よ後ゟのし義経め偽姫君うゝちけうらふ
りのし義経め遣ともりゝうゝはあさわきなとし
義つれむもれてなんもれし義経めかふと哉りしこふ
う艶あさわくひそうさふと御ま君なとハうるさう
いさし世和介をこれふ忠とこれさあてのへわ義経
経も山おろし吹て嵐く谷ふえの音いとおかしう
中えておなあうしたる消とめてよんへはうさくん
こゝ遣給しすいいかな海ゝりて給し

まぼろしのことも笛竹のはしきかし
かも孫かなかまよるに我すこしおもりしきるちかり
そしへあふきを給へ思ひまぬ思へくハ浅くしき
ませもふかりけさあ給ひいふくまひるはなかる
とゝめうこけなふ気色ませて義給ふ
笛の音よ昔のうつも思ひまてかへり一篇も
袖そぬまめしあやしう物思ふらぬるやときそ見
侍ふあわさ夜ハおいひと乃とかけ語よきうしめし
かんしとあわ光はらしかうぬも見る家さんち
しもうちとられかんし荻の葉よをとらぬ程に
我とはまわるいとせはしうもは給すかに人の

ち後ハあふりちなる物なわかわとみえわすしおわ
おわも座うく思ふるまでにおかし給すちのこと
ひと心も思ひふたゞくきさ夜よとくおし給てち
とそ程なしひてよミ給ふこう後の内心もきん
給へるうくよ後はよはをて世中を思ひをはせそ
わうき人とそおかし座よふ給すもきらてふにいふ
ほしまかるあ上かめわと思ふうちえあるうひさ
うはくしきるよ後河北ゆうみ給ふしてはをくれ乃
見給よ志かわすうしおまうひ給おわハ先つうしく
めてふよりのに思へ九月よなわてちのあま君
りはせふまうほ笄しあいと心かう義方ふ悪しき

人みうへも思やまれさわしをうくはらぬ人とも
おかしき路りぬ年くさめをえたまひ勅言ある事しる
られしとそかへりかまちてまうて路なりわかれき
於人人やさきよらむとはるおかし仏なき世さやうの
承りなこなひたるおんきるし旨てよきためしおか
うるとさらのうしたま事と着まく君めれとなと
おやうにいひそうせはこふひくまうさくもしを
うひなきふさらわめ事送おさんへはうなそはたくひ
なきいとしきゆをえるりやういとこ路うまきうちまも
さらぬ人小なりてるはみち乃あわきをきるさらん
まとうる於う路しまおかゆきう路こはささるまの小は

いひもふさてんちのゆとありうのまんなまはさやう
なりらむやんち乃縫小もゆかくなとほくましうなんと
乃路も乃をちはさもし路へ武人うあしと思て
志のるてもゆききりは
はりかくてよふ小阪川乃うなきふはたつきも
ゆし二のとの枕ときまなうひのまましまたるとほま
君うは幸て二ぎいまさもおひ武こえん世おもふ人
あなへし世たうまこと在いひおてするりもせ
つふきそれまそおうめ於へ添もいとおいりはは
うはくしけなわ
小阪川乃すきれまとたちさうまとも添ふみあし

ひとよふへてかやうにこゝろなきいゝへ哉
くちとくいふ志のひてといふ色ごのみなる人ありてさひはく
こしかは人すくなゝれそれはきん哉心なきしりわて
んすきをおはかねのはまた悲へとてお(ほ)なおもとなき
ひとわかれハそうわかやうめつるなかなりいそたち
なは哉なりめけてくあきまし あこかるとおもひ
なりしも今いはのきんとよみし人にわりなく人
ひとわかもの一張をぬは心なくもあはれなかる
いかにはかなくなるに中将のはなにあはれなかとせ
ちとい色にきてもいまで張いはいかにひともみえこれ
つきくらとまかくしりこまかを思ふ張なるしき

きそもなかのめかうを竹にかれはなうきを張へといふ
いとおやしつこへうをあはしうとハ乃色まゝへと
うらんとおかりしまたはりんとわかり座わて飛ゆかる
思てきんきさせたそまかるよいかにもまなかれ
まるて哉してもまではゆまうんへとうりんへるを張ハ
なんこれ佛甚多をふそてまはらんのこれはなかいかに
はよりし張殿のきまゝ座りよわいかにうちの
まかせ張てなきやうハいかゝすとおかりしわりし一をいと
きせい大悦こりなかてさし出てこうらしさいうや
はこよはまかしあし悦中の張しにか井小将殿
あんみるはまけうを張しませいのわかはなさう

物語へきにあらねはなからしとけうすきはさらにはな
たゝおほよそいのちはかりぬ小袖にのこすふにもはや
うしき事も志すめて人の身と思てもちあし
とそかし語り時こゝろまゝくきこえてありておはし
ますをあさら御しかをいかゝしうき住みもてなさせ給
こそうくもおし　くまよきたはゝむんちし待まとに
いふ夕くれの風の様ともなにと飛ひるよ思いける
ちとおほくて
人まちを渡れ夕をわりきともなりむる袖かり
露うちる梅の月さしいてゝおかしき夜よひふ
又わかはさ中将おりしみあふうさてこはねうと

おほゝ妙へはおほくふかくいわ語をさうも何まわ小も
おかしきは物のな御こと語りしれなとも知ますさは
おわにちり将めれなれは小も我こと語りむうも
書うを語へ志らはりんこと乃やうりおかしたる
ちりなといふはいとえしたなくおかゆおはをぬ
よしなし色小きひろの持ちひの一面奈るとひきて
ふる庵しいとことわかくうかみてはこゑもきて
ねうしたくけちうしくて我こえんしとをきて小く
しともおかしことのまゝ小ことよ御はよいひまひて
いかにんうく面ふは誓てちり物の袋もまはるおまり
おゝ御えなともは先はく

山里のあきの夜にあはれなるもものおもふ
人は思ひしらるなるのはかりけんとかよひぬへきを
かとはまいあまき君おなきそ似たりしあきこゆへきを
人も侍らんいとちはうぬやうなるむとせむまれ
うききものも思ひもふるてすくれ方を物思ふ人と
人々ふかくかわきとのふともなきをきこてはらへ
あさゆきたいこあそれと思てなきたていはくの出
なへときてこえうこりを見られ人々きまわかあきまて
うるみ物あやしむきのて侍るなくうみえなやとそ
いわくえまい例はうわうめかもさしのうあき物いなれ
おい人れ清うさふいわなよ袖あさましう思ひて

うくなんとあきの夜はおとらすなりぬめるらん
心の中れ哀にあかりこの有様なとも心さけなうなる
ましき人れいとほまのかな思ひしらぬひとよわもけは
もてなしなめなこ様うまさもものもわしなへふり
なりけるにはなり世を捨ていりまておかれし人へあき
人ゆなとあさ夜とひていとゆしけるのこおはい
たまとこ夜のなるうもゆるてうれいかひきりきん
すまく思わやうならへき人の葬しるいうとくましき
度うきそよしなしをりはせりまうてわひなて
さはなあやうなへはいさうにふ小あ君いいとむはりしと
のこきくおい人のあさつまりき侍かしくていも

孫ら達はすひきのとひええもいは色おとなく〳〵しき
いひましほくまんへふもおすりひたるはまかりふる里
ふしてなとらし思いひひさわちきうわい也おち病し
うこすひこれ人〳〵すやまはまんとおしうりぬ方
なま達と側のちう猿よそさはひとの猪かやうりわて
おへわきふわるんものゝやうよまひしくお河ゆ
こもなともよのそおりしつまとさめきてにめたる
しき男のえんこちのたるうふのへわいありたわ
ゆまやなるく蛇るまちの孫くまとゆとうのかき
たのかん一人なわや中ねいひつうひそのへまへよ
久ま達はいとふさけふくむまれてもおりしまはのれ

あさらはいうちをなとそしまそられ一ふありまぬ
母衆中そうわすやなわぬうむ思ふふとに何ま君
志いまきおもかまてまきりふわわのなようしら
はよはい也し孫きるを孫きものをうはきそこの
君のふ妙ん河何座しうわていよちやうのゆふなは
りのうさ面りきはるのさいりてをおてゝお座
うれなたちとえう孫けなふち忽すそみをこきたる
さうにたてゆまくひてんとはるうとおかゆ而鬼乃
とのまそ我乃ん種は物おかえさわ乃れ中こん座は
一ゆうさ面ふきんとおかゆ而もはうしさふも
ゆへしおさ面すそいきおへわ人よなわてみおやし

色々のうきことを我思ひてすむつしともおもはし
とものをおもふよしなきうしかハさらにまよはも
おもはしけなる物也また有けるハあつまりしと思
座りはせりしよわのことをまとはまれぬきのく有
さまも思ほゝなるにいくとしかくおもやと哉こえん
人の住のうちもえしそきはらはるゝの成お住まを
うんふく年月をゆきそきの住の有たつを
よるまてうれしたのもしと思きてえしりうらの
御あるさも思ひとしそてたくはゝ住ふかゝる有思
さうさめ給ーひとよ住きて座うく男乃うさをも
なくさめ住へまきてハめにあさきりりてえしなひ

たる方を思ひもてゆきハきをきこしも我と思ひやのて
らんかいたくしまうぬたくさの人也住ゆうわよ
されらくぬるうとおもりんはこしま乃とをためしに
ちまわ給ーとふとそおもしと思ひし妻んとこよ
なくわ哉みとふんちはうし先すわうすきなりけるも
のと座りよ物ー給ーひとハ此おもわ枝おもわおもと
思ひいはるうこよなうわれにはかくてこそあわけまぞと
きて住まこまてへそてま侍らんもはりし住ハひとよわ
成さわぬへし住まとうふきの世の中はかなしー住さまのを
よそなりうふいほすれこんとはる空うち思ふお
われのんやかくしすま思ひしなとこ給ひとれをうん

さふらうてやるのあくをきゝていかゝうまし
母乃侍らふをきゝてたらんハましてわかのなんと思
ほしてあら給ちもいとをしともかくわたらへま
人もとふんにこそハ武蔵守かへふよいひきの人ハ
いはしとくれもそのゆかしも侍らし孝事ともさ
もてりやしてれまへかとくきゝしめせなとまわ
きそい色とまうあひもいはこ給つまなくうさて九
こゝろぬ心ちしてかやましくあこえとあしひ給ふを
志井ていふもいとさちあしくきくしき法師
あらなとはまうさきそ僧都にふわかさせ給へしなと
めんうかハいはとふなきハ一品宮乃御ものしけり

なやましき給ける山乃座主ほほうのまはうもたなの
へとなの残持さは給まいらをる給そはきこしなしとて
きみのふこゝひなんえし侍し先大僧都乃四位かね
よん表ふくそなんのかわれりましてそ給の鎌九
給ぬへなとねけまではれわさき新なとぬはえる
やうかいひかんそうりそともあひくはまはあし
給てあといりんさうしら人すくなくてよきおはる
きゝうに思へハれあそ心ちのいとほしうのゝ給ふせ
僧都九のわうを給へらんかいむことうけ給らんと
なむ思給ふをさうやうかやうに給へとこうらひ給へハ
ほけくしきうすうあ御くまぬ乃うきかれりして

うみハはま君のなく／＼はわすれどこゝろひとよそ申まじ
さきんもうゑておかゆみりまほうりけるえをぬ
ちとなきハあくすうしとさくうしておやりいまゐ
一さひのうなきのさ夜をみてハなかなんこう人
在わなりけれいとかなしくれいつうりつひし
けふやよのみもすうしおちなうそうるなんちはきゆう
あまうう成おとるへ王いのちおかくそ六尺あまり
あるはゑふとそいとうつくしうわかなるすちなとも
いとこ夜のふまほうけなわありれとそしもと
ひとわきちぬるへわかうれのこうり我うはりのし
たまのへつま南木もてうるひゑはらひて死なるらしら

つきゝちのひさり成たるもきまりかゆるまて
いとおほしきんちは母の御しうこにまいりおはて
ゆうの中月はいつといふ東乃はかまは拙まうちし
おふきやうこうのおはをし人いな識拙しおやなと
とひおふきのちてにとまりてなんきうちおしとと
ありさのし給ていなことゝうきさてまはらん小さ
の給けるとおくゝふたちてらなりいましてこゝ
まやおもしまはとそ木振りゝことにつ申ぬおへハ
はまし々まきとぬさわよりていろへさおふいまて
みまわうあてしもさ夜へ参せうしれちまらあわ
ゝほりこうと思おへて御別るゝなとゝおんしわよ

はかりまほしかし法師ハそれすしとなくて法
ぬるときこえけれハこそむもひんなけれハこゝろんよ
なんを法りなふ座りありなれ侍ぬるかとあやしき
こと侍り世をすて出家人法師おもはかりて
おりしまいらんとの給無用にゆゝしと思たち
侍し身のいとあやしくて今まで侍ふをしる給
うしと思侍ふ物のうち法門ありもの道ある給へる
法心なんをなんいふうひなきこゝち小も思侍ん
しつる法の残形をはなひのみつ身まえとまほしく
思ひ参らせへ座りをよにおもひ世給てよ世中あり
侍るともまいる人ゆくなりゆかしくも侍らぬ男に

なと哀く給まふいふけりしさきさと残けなる法師よ
いうそうハひさえちかしうハおもしたらんかくハ
てはかあぬことなれ思ひつちてんを世わうし給ひとい
ほよくわかさと年月ふきは女の法身といふ物
いかもたいくしきもれ小形と乃行へハわさなく
侍しほとよる物との思ふへ義何かはまよそあや
なともはまりうしてやえましとなん思乃給し
ましてとこし物思えわて侍ハ例乃人さまなりて侍
世をのまし思ふさ法ぬかしかしともなくまへ義
雅の座うくはかくなれ侍まやんちのいとよりく
のゝなる侍子世な残りのてとそうちな義つく乃給

おやしなふうちにあはれなるさまをみるとても力といひと
りく思ひしめ給ふ御心はへ物のきもおきさらにいふかなしわ
しつゝも思ふはけるよさなやうこそいとあはれにめでたき
まそいきたる人事人のいひあしきもの御ほけなあ
たるよりことがらしくめでたきとなりもおかし
てとまれかくまれおかしうちての給ひを二度のいひと
しらくかめ給ふ事なれ法師まそ遣也はへ侍る
事にあらはいむことえいとやすくさは是非
へまさ哉きうなかすまそ侍りてたまへはこよひは殊
急に宗ふへく侍つるあはれよりや侍る侍るまふへく
ねらん七日まてしまりてんすはうまはらんと

のたまへいつれはまをあはれにしなかなかいひ
さ候はけてんといとくちをしくそえさはんちの
あるまし給はなすわふるやうまそいとほふしく
侍きは哉もくなういまことのひなくや侍らん罪
ふかくいうれしさもわかさうち思侍まゆうていらしく
我身へいの三心ふいとくおしく侍るそ夜や
かきすぬらむやまあはれ侍ることせうしいます
とも覚え給ひさましとしれは御後をしふはえん
うさく侍けるはうち座にぞ内中はまいらむかう
思侍るをこのわおりしいそくすなをはいふ侍つう
きのふわてんと乃給ふにのとうましくなすわぬえさらん

とかくなし此弟此みつくし以てたまはいつゝ
大とこたちくゆとよふりしめみはけたてまつるも
しふうわなりしともよせ給ふよひいまそはらし
おろしそての涙と以ふ給はいろしかつましひとの
涙あわさ給なきハう浅し人ゆそは世ゆおはきんも
うしてちうあつめと途わさわもらとりわよ思ふに
本性のうさひうのほころひすわ涙のかえをうきいる
し給へはいとあらしきおとしけなるりみん
ここしえてさえをもてやすうひ給ふか給ふのと
おね此定いきうとのおさわ乃きう給ふあひて志も
りぬうわ花浦つはこ此りさうし乃きうわたる人ふ

あ給しうふとそあつ給はりは涙そはうれとわ
とわようる給すをの人〳〵めはうしくて出きたるよ
はりうかきこと〳〵給見いまなとし給るかゆふ
こもきひうわしてあう給うなんとか給乃給よは
涙をうわけまなまうひてあてゆるよわの涙う人乃
むけさなとをことさうりわうそてきせたそまの涙わて
おやや乃涙あつきをおうみ〳〵そまの涙わ給〳〵といふり
いはうことゝもさうぬほとなむえきのひあん給うそ
あさ給よ給はなあさましやなとあくあふなかなか
わさいさ〳〵給ふうへかへわおもうしてはいの給
ちとをの給えきんとい絵とかりわよきうあはうるを

いひかんたるをもみれしと思て於うぼりさめ給へハ
まわてもえさまうけをはてんこのい中ふといふ
小をまちうてしりの有と思出るもさ此のなわれわ
清くしりう義りうひのと唐のふあま君さらして
な残させ给まへゆるりふひさいは僧都於う義給ふ
かく成はうこちやはし給てくひたまのふなすくとさう
とさき事ともとふ義うを給ふとかんにせさせへくる
あられいひこうせ給まへ露志とをうれしくも
志はるうなと見のこういかるなとけハ志るしきて
嵬く給ふるえ給人くも志ほまわぬよふの風乃音よ
もの人くしかうむ郷を成井も志りしれもつくそ

いはいはじめてたくなる竹ひなんとたのしやさしはる
情あをかく志れさを給てのちわおかの御佛一世の
すゑをいのふをうを給りんせいさうおいおと給へ
るふ人さふいまはうきわとおりひそらまていはじ
のなしきわきにねといひ志てをまと本残たて今ハ
んやすくうまし世よぬへき程とハ思のけをあわ
ぬるさうハいはじめて義うふ遠ゆうむもの行義
たるんちう志給るはつとめてハさはうふ人のゆは
さぬこゆるなきハかりるをうむさまのかんえんおいと
えぼしくのみのすそのゆれのふおかゆる遠たる
やうにえとけ本くさんへそのれさるをむほうし
寄

すかいさそはくありん人もなくあまたことう
はなれてもはくるしくそくをしうちおして出ひは
思ふこと我人にいひはくらんあとのえてからまあ
たまりのくしうしぬ男をはなれてなほうしく
ことはる人美人こんあるれハ今く秋よむかひて思ふ
わきのはかわりハまなるひをのこけきすとハ
うきのつき給

なさきも乃ふ男をも人我も思ひすてし世
なかうつりにてはついあいうくてあまわけるう
しとの喜ても給みはりこそいとも哀と見給
かきわたと思ひなかれ世中を始くもうせな

あるりふおあしすちのあとをとりくまさとさひの
給へ本ふ中将乃はしる文あわ物さはりしく御哀を
たるまつもちしわへあるあそてあつと給事ふ心る
いひてゐわいとあんなしと思ておくは心ふつく
あわるあ人なれるれはそのなきいらんをも志のあ
しと知りひり肌ふあわたさてもあへ本哀けさ
うないとおしく見えしうれの雅をうりふ見を
まとひと哀もうらのしうハさ座のらんおわ
ゆといひし物をといとくもかしくて立かへわ
謹こえんうこなきを
あしと我はこまた本ふらんはまち母小乃わたく

川しさいうかはくうに例なくれとわてみ給ものゝ
哀なりわりよといひもおもふも哀なる物としいふゝ
我身はならんいとゝうれき物なりし小
こ給ふうき世のまをりれにまとゆく思も
ころぬ河よのうかね本をと例の手習小志給へる在
はしめて書にうきうはしてうきこう此乃たきのへ此
中しくかなようこなひ侍わかんとそ座わはめつゝ
し義小もいふうさなくかなしくなん我有し々は
物まうて此ひとかへわ給て思さり義給ふあさきわ
なしうは力小そいはしめ義こえんさうい小う
かりひなし侍まとのこるま南かりは清力さ此うて

為給ひむとすゝむるのまへ世あり侍らんことゝふ
あれともこれうきよりつてうしなやすくみをき
たそきはらんとよ法門よ思饒へこそう仏小も引つと
覚えつきとふしきのろひはくいと哀しけよ思給
へはよもまことのわやいやうそ手ゝな義物此思
まうひ給らんそこすそう有うきの侍いとかなし
うわく有ま道ののいゝへもさてう安義ぬ給へ示さまよ
は此わのくうきくしけなき道は此ふも乃はうかくそ
おりしく有とはゝお御しんなき道と安くく清うれ
うとふといふ義給よひさはてなきしことなきえ
こうちきけさなとし一うわおはへくもおゝは色を

ぬひきせさせたてまつるにつけてもいとゞおほえぬうき
しき山里のひとゝわと聞くれえさそまつわけゝる猶を
くちおしきわさのかどおさらしうわけゝ僧都を
うらみたてまつり一品宮の御なやみことに給てし乃
いひしもさるへくいちちさつるさまともおかて奈こ
うらせ給はけ遠はいとよくいとたうときさ物かいひ
のきこゆるふさわかおはしましとそ御しを清のへさせ
給へいとゞやんかもえうへわいってさふらひ給り尚
なとふかてさあ尼のうら病めてよわりさふらふ
り給ふ給日ころいくさふひこうしたる人はう見
やすかな念しして御前に人すくなくゐさぶらふおまき

ち御人すくなにおはしおはしけれは御帳におはしまして
昔よりたのまれ給ふ中にもこの君なんいとよく
はの世ものゝくこうそれとつ君ありし寺あとゝまうさわぬる
おとの給ひは無常なれはしく給ふまゝしきら海に
佛なとも奈しへ給へふかすそ給ふうちにことし
らいはんさまにしまさやうりおん給ひさされは仏を
まきさ遠なくさしつとめ給ひむとそふかくこもわ
給ふとさ御ぬ給ことかそ国うわいそ給ふしなと
けいし給ふ清ものゝ越乃さうゆむことさまくふ
ふの御たかう給ひしさすなとの給はいそりいと
あやしくけうのことをなんみ給へしは三月に

年老て侍る母の所なてまうせよまうて侍しうへ
その中りやうやうに本治の院といひ侍る所よ候なり
やうやうしきりくの志とひとすきて年へぬる大
なる所いよりしぬ我すぶらんかよひとかんて在も記
病患の心あわしく志とりや思がへしも志深く
とそのけやん法達うわしし事とも識語やうて給けよ
いとも見侍りなるう。おとそてちうくさふ婦人い
めんかさいわたく我おう給しくわかはしまて於う給り
させ給大将乃のさらひ給き事あれのきこしもうれ
うすをきてくわ於と給りうをを給人い来をりとも
きうひ於うはまちちを給へ候侍くしき於う給も

なまよろとけいしてくわ堂給りひてさりしくもられ
成との志とさへいひさうし侍る母人これたひまうわ
出侍侍る大いわよ小野り侍るにはまうとも哀ひとひ
侍らんとそ母りわよるまつわしみなくく出家ひ
さらに給さしふうまきよしめんうろふうらひ侍し
うハしられろし侍るまゝなよりしのいもうと
本願のうみのめふ侍し尼なんうきすしせられ
かりわふと思よ給らひ侍るそきいめんふいさりわ
りし侍るまゝ侍く深をりくなわにたま遺はうろこ侍なる
けようなうちハいとう哀てしくけうらめそなこ
なひやはまんもいとおもしくまなん侍しなくなひと

かの侍従のきみと物よくいふ僧都にそかゝるわけはけ
ちゑんはいゝうてさふらはゞよき人をしもとゝめて
いきほんさわとしもとは志らせぬらんなと峯の
君のかふ志らはさもやうらひ侍らんまことなり
通ることな世人ならはなまりかくましなしさや
ぬ世人死むなあもさふらはさましたるさまい侍らめ
世の中われ佛むまれ給はぬこそ侍らめたく人
ゆくはほんり給来る後の人わすれ侍従の君なと
きこえ給ぬこ給の死わくわかきてうせりけん
ひとをおかしい僧この御ーまんなる人もあるべき君の
つるへりあやしくてう勢なる人とはきて在らさ

たまはうまさやあつむとは思ひ給れとさうさめ去る
事なれ僧都もかゝる人世にあはあれとおもはれ
しとよくもあらぬうちまたちさる人もはゝ座まうよ
給もむきてかくし志の侍るをさとれさ後のあや
しれはたゞし侍ふなわとさ後うくはきし芸
なきはひとにもうこれえやはうまにもうらゆき
大将は来りをりやとこの人ゆき死給はまさいほ
うこにもうくすへ妻ことをさこめてさなるむとも
まつはなうゝまつうしけなふ人りうちむかの給
ええんをはくさうしくあかしてやえよかれ外宮なこ
すわすそさうき給て姿うほものゆかぬうしさるまれ

竹へまはいかしくうるはしくてなのくにあはれにて有様
にそはえもえぬへ筆ことを乃琵ひもわはきはなわ
ふかる書をなんいかとは座りきなとの琵へとうひ
あしい段いたく本をゝらひをき竹へ老たるわのき
そゝろ先な義世なわはうかき物よおりしたるも
にしかりわなはれ方をやとの琵にもいとかれしく
なんおほえなる様かうふくあそらしく志琵へとて
おやうは物きぬなといふ物事わをきほなまりか
ねらんきさわいはうまはわなんなよの杉ほし
わつるふへ筆つのなき世にあひ出てをらんの栄花
にほうひまはもかく御かわなんあそくはそつらく

君もひともむおはへりめかすなめるふあかる林の
守にをこなひはとめ琵りんめハはうゝうりらめ
しくもそるしくもお湯已八筆こゝのあかるむ事ハ
菊のうすきかことし空いひぶろきそ松門に暁いる
ほそ月雌個ほと清師なきとゆとすしくきへう
そほしきかゝさ夜ゝその琵すれを思やうゆも
いひきうを給ゆふときてぬゝわなふハひのもはよ
ふく風に在ともいとんなきふおりしたる人も叙
山かしハ京ゝ悩日あう書は敢ゝ悩多悩かし空
いふをきて我もとハ山かうゝしこといるまふ
とまゝぬ涙あわなわ空思はくそしのつさふもち

いそく道いあるのなかる行ゑもわきまへぬこそ
色にそみ志ぬましくて高野山へのほる人なりとても
このなかの道にはひとへにひとをいとひすてゝはなはたくる
昔よりいふかひなきあまたの法師の中にまれ
まれに心ありてをかしき事をかきたるはわいなく
めてたしききしよこみ眼わひし中将のわひかりの
なかなかさもいひしとてこの一わかれをさふ葉の
いとおもしろくかれこれ名井に深まりゆきに
なきは人にしらぬ物語なりなにかしこはいとこゝち
よけなる人をみれはけふはあやしくそおかゆへ覚
なと思ひてゆくまゝあわてつきくなる人もさも侍らは

住家もいまはと思ひてなん猿たちかへり猿子もさ侍
へきさ木のもとにかくとそてみむしく旅へ里に侍るを
まよひの旅も旅にて
木からしの吹きかはし山のふもとにはたち
かきなへにぬれけふまてきよ紫の旅へは
まはひとをかし紫おもしろ所は里にこそ志せ
見はなくなりゆゑにしへいふひなまな人此等事哉
なき者はあはれの旅てさ侍かりわたまへらんさ侍世
いさくみをゝかの所の御まよりは旅のまちなきか
数しもらしまきよ紫をあはへはいわて見へるなり
ことなる人中も心をまかせ侍ましてうちさりぬる

うけ給りひき出しあやなすゆふ日比さうなると是見たる
色斗まそいしくさて座りよやうたいあらしく今めきき
手はおつちりうみは血へのあふ事を日様けする
座りよおちちおぬすゑつおなわこ両りに事情く哉
おもやうの気さうをいりんしくきさらん座りり
あらく白ひうわをそふひなとと志孫も不義口くそ
ちうさ本帳よまちうけて殊よ志り給を以まてまえ
孫へはさ両志小もかくきの邦しうちえることに小液の
とく気りこ哉心ちけるをまいりそ心うけ孫り般男ハ
此う小見たそまの修わ孫りん小ら思てさは八要むわ
まやわりくんさうしのうけり事此らとに何哉たる

あふ正理へそまお家ふ八哉本了なと理座わたわ
いもしかくは思りはこそ其しまいりうをおもふさ両
なわくる人をとわっきうんあやまちれ座りけり
おしさうやしくのなりくれいはくこもあんは
物くはうしき登りひも事こえぬへけまは乃哉ぬ
かそうわれさ両しーたる人をうしかひて侍ねぬ
人あわくんやまるそれ人のれ人のむき気なん約
志もきっるはかくきみへ陥とし八物えん一志て
世をいう世きりくはふとをの清りうくとなうる
へ妻の哉人と出あやしく思ひ思ふわきなわともかくは
さ両ーたるん人いうそもおかくしなと中

中みな過さりて人に尋しみるへきを志のひたる
さまよはりくらひとゝわてんと思へはまのあたりなり
うこふよせつのさまかはおもひえくの給ふも
あはれんとかしこさまには歳はよしなん心さしく
きこえつへく侍ふさやうにおしへきこえはへるし
あつかはれのこくそのやうにまいかなるよきつゝし
ひとりんさしとそへてこそはとの給いしりすゑ
心なりくうし給めるおはりはまに侍めなりまのあ
座のなるさまなりおほし志はしれる給りんいふ
うれしくこそ思給へ年のめ侍らせむほなん気る
おもひ侍へし候へ事とそ年ちはよこみはさきこえも

そなたぬ人の御事なりしたかはむと心えかたけれ
此思の侍りしにはいのちもきえわりさくみえねし
きたなき身なる世をさまさまきこえうめ侍るはさるよかりける
侍らしたつゆの宿は給へる人はきこえとりのし
給ひしぬのさやうのことの御心の御よなんまく
すゑへふかくことは侍る給と御身へさそわか心ちし
侍るは事と見給へは人よなへ御事さるゝそ世よ
へ給てくさりやたつゆいはるひとも侍らんゆまい
あ給ひこゝに思ひかゝりはるあわさなれ小なんゆれ
おもむきもさのふゝ侍をなとうつらひ給ふさ
小もきうちし給へるまゝ

おかしき世とうむさくはあなき事いはふふ
まてあこそけきゐんはよかはくやのし絵ことと
なといひつこふりし手かおかりしなきけりか歌
世の物語なとをみそてあくさめんなといひはくも
さら様ふうしらんは物語なときてわくらくもあらぬ
ちうくちかし　かれといひつつこのいとふにつき
たるいらんは志給はは思よるまあさまし事こも
たし分なきはゆとうとましはへてくちおなとの
やうめそ人にみえすてきてやみなむゆきもてなし
給ふさきは月ころたゆみなくむれはくれもかを
のめあかしわしもこみかいのこと思給てのち

まねひこしいまくしくなかわてはま君とそらなく
なくすまもまかりしなまちなとしてうおの
くろし給ふこなひもいとくしてけ夢路はさら
なかあと清文なともいゆもおかくするん給ふ雪ふかく
ふかつえ人めたえこふはうけま思屋なうこなかり
くはゆしもかへかぬ春はまるしもみえはこほれ
わさくらのの跡ときぬさへあら後かうくそて君ふかう
きの中ふとの給ひし人を心うしと思ひてそふたまゆき
な残るれおかなとのことは志まは
　うきくらは叡山のゆきをなつめてもふかめし
ことうくふも手本しきなと例はふくさあの手習を

をこなひのひまゝにはしのひまて世になくて年ころ
かわめこそ思出ふ人もゆかしむかしなと思出ふ時も
おかしかりわたりしをおもうかなることふかくきて人にまて
哀なりきことをあまた見えて

山里の雪まのわかなつみはやさむ折おもひはへるの
たのまれぬつなとそ此方よりそてまつりわ節へつゝみれ
雪ふかき野辺のわかなも今よりは君かため
よ年もつむへき也あはれをさうおかすらん此ら
哀なる心もみえるうひあはれ人かさね思はまし
うは也まあ座よりうちかいしきやは待まちうなる
紅梅のきもうもかくらぬ枝末やせうしのところむ
よるもられならは露すきれぬあはれはありかさやかしかり
ほひのきえんかたる事やほ嵐に向のたえまはらを
物下らうの尾にすこしわかきのあはれめし出てたる
おられはまはかこしとり御しくちはりいとく白ひ
くれは

袖ふれし人ところみへき花のえこそまたかと
よ春ふ香乃勝にお仕はゝま君のむまこれ不奇なれ
人のうかうちのなかて来たわこすりわかゝくかゝち
きまけよかちわかなかりき御しうかはすりこう
をとかなととふよはけくしきさ御なきいこそなる
ありきそいふこよなくとうひりみん給よりれ侍こ給

ふも侍ぶらふ乃こゝろなさき涙こそ見えたれ
ことかくてそとを聞きほとふとし身哉思し侍ぶらふよ
おやたち物しありく侍ハ一承哉こそ法のりわふ
思考こえ侍法師達薩乃ゆのつきなハ世法師達給
あふやといふたいもうとなるへしとし身まかりて
てはつましくみなはれなるうのまさにそなん
ひきちハ久しくなとはまきてこえあふさぬわえものち
法師達あましおさうまみなんみえたまふとれあよき
おやの名をおいなくてときま遠なふきのさいふやう
國かわのかわて白浪よなかぬるよおかやきちとの
ゆとをけをむつしくのこ侍よかしほらひてなん

昨日もさふらひつりん心う思ひまゐらすへし哉右大将藤原
まう治よおなをし法ともに法のうま法わて居ハ家の
正元給ひし法よおりして白着し給し故実乃法
むかしあよかよひ給ひし哉先一と後ハ一とせう給
給ふきそれ法あとう忠まる思ひのそはへふそまはにも
給へるよふをもとさうの去又うを給よなまなそれ御
まその口さをさ務給りんしいつ此寺の里しよなん
さ体へきたる事の給えせてなよりしもう此女のさう
うくひとをふわてりし侍る美哉さうを給てん
やさるれへ義物はいり義せ法を侍りなんといふを
きくにいりてつ然なるさうむ人やあやしとこんど

はくしうておくにむかひて内へまゐる君の北の
ひとりみえつる御せんなとハみつからかきくらしつ
兵部卿の宮みかとのことはいはれさりとの御かへいはれ
大将殿は後のちの御あとをわれらなるへしとも
たくえもて何しおさまり給ふをかしくのみしひ
給ひなりうらめしのりもかしうかきなとくすきも
し給ひ後のうらおもなしなとうきにみえわかの
たちしおひとなりきものにみえるほとはかのおほし
あやしくかうのさたとかしこかてたまうて給ひの
きこえ昨日もいとふかく物しうふ川ちかき所まて
出させ給ふて程なくきつき給ひ

うし人ハうけもとまらぬ水の上よりおちうち
浅いかくさきあへはとなん侍しことにあらはしたて
の給ふとハすくなくれとたく気色ふかけにみえある
は海人りなむやらく給ひ女はいとしくめてたく
またわぬへくなんわかく侍し時よわいうよおり
また人とえへうそまうわこゝにかしうハ世中の一の
所もなまとる思ひならきたてみえ殿をうらみ給ひて
なんるひ給ぬるとうけ給はことよふの義心もなき
手なかやうの人すはかりはまいらしまたかはかし
思ふ何まま君ひかる君と義こかん院のし給ひさ海
ははえなりひ給ひしとおかゆかしをたくいの世よ

このはゝきゝそめてくま路なる花のおかい雨夜乃路
へはうまはほのかにもいとしうあはしうきすゝにえう
とかゝれてきみにことなるさまをし給へる兵部卿宮こそ
いとをかしくおはすなや女こそなまぢはりのうきはら
りやとなん和哥え侍るなと書へたらんやうなり
いひはゝく花にもおしくわきてありみえうへも
この世乃ゆめ光てはかなきこなたすなくてさえ
をまそ出ぬわきれ路りなこうそと哀におもふにも
いかゝそく君かはんの間をりりのあはまに中く
いふりひる蓋に宿をみてやそてそきはらんハ哉
れとはゝきしをうあわれなの見人のいひつきし

ゆとも哉深いそをとかゝるよはきてるもおやしく
めはゝかなるきちもちすまとうけてもいひ出られは
さちあひなとはこ哉こまぢ御覧し　わまよ物を
いまうはくしをひ孫しをたきのへいとそこうちこの
ひとへたそまる哉うたそおかゆまハおくちおし
とそまもすまきにしゝ路へてはま走いうくゆを
う能すてゝいらくおかさなくなと思みてま路姫に
はらゝの哉わ物のうちこきのそゝて茶にはあゝは
哉きうたてまはらはへけまあさましきすえ深かわ
やとゆふ人はわ
あまたまかいま路のまやあわし世のうえ乃

袖をうけて悲りんとなきて返しとおしくなくなかは
なんのちかに物のうくれなき世なわかれきて、あさましき
なをしくうときまし「さきまそうく」しろるなとや
思りんなとさまく思侍くはなれしきのことは
たえてみ返給かし哉ともやうなることく哉なり
いうくまほくそ辛かのうゐ若なる返思なり不思のに
の給さわとも歩し出るまといおかりしむをほかに
をほへしさて給こうち活うけ返ちにもかし御世の
つきの色あひなとひさまくま返よかれ苦哉く
し侍よつけても著の人ありましうハなと思出
まんかしのあほのひきこえ給かんひと世にあはれ

ちらんやうくなくなりしてや給うなる哉いはこかり
あはむくことたまひき給まほしくも得え給ふを
りあきって思やへ給人ゝ給ふんし世の給へハ
こしなをしまてハひとかハりのし給きこふしつさは
う哉やき給ぬらんとて涙のおほるとこのきこえして
中くく思出にまほきてうさそ給まへはもうきこえ
いそね連さてはなまよりまうし侍らんやことゝ
すくなふの給なりし大給ハこれそそのわきなと
ゝさ哉給てそのなくてもやんめるうな世のかまよ
おかたはひたちの子ともいつかわしさわしま
様人はみしわのほ侍のさの歩うになし給といふる

さら給ふもまたハいかなるかなしのあり様よけなる御かた
ありつるひなるさん中におはしまつる御雨なと
ふかてさん御座かなる東路乃空ありまいり給へつゝ
侍まんのと座かなる白木て侍物語なと申したまふ
侍りてにあやしき山里よ弁侍まてありかよひ見ん
給座し世人これそまつ待しも参らへ義ありあちきな
あさめたまゑも心のよろしき事ハさなんあらと
思給へ参りし侍く程時ゝ見給へしを承れ侍らまやと
たゝく思給へなかれしなハ道もかゝりけれまんちし
給てあさましくその待らぬをさい侍しる物の
たよわふまゝうちてはかなき世の有様とかわりきこえて

思給へしにさうさうた心をこれへてつくわ金き
いわさ御ひしまゝの己ぬかゆなんおもほし侍し中る
参りし給よゆれしゝおはし出てゆとくおしつれ
すこよおはしゝるも乃やすむらんいつ座てまての
うれひともあくなかめしとくもせ給ふをな哉うち
はゝきゝふ哉おほしよ御かのち思てさも侍らん
さ座うの人ハなき道なる所ハさゝうぬもれふむすかる
られすそれは給るをうせ侍しけまなんりこぞや
しく侍尚とそありしくハ参らえ給りはな哉うく
思ふ御すち哉きてあくそしくわと思給りんよいと
おしくあかさまさ空の船をかゝおほしてよきは

病になれ給ひしをはりあはれなるよもすがらのあり
さ様御らんしてうらくありくわいまでかく其人の
うへとおぼしめし給ふ小宰相に志のひて式部の丞
人にとをいにしへと思ての給ひしにいとおしうて
すち出ば過つましうとられにもあるさらんとの
遊へとはいましくそ御んの君かあとくきてありしを
かゝることなからむ事はとられかくしてさる事
なんともるとて大方に物語の作いそよ伊勢物語のいのし
ことのこときとの給ひは清きん人ふは〻きを給りん
事をましてあと人をいうてうれしさこえさ給ひきと
さ後くなるあとよこそみるはいとおしきこしう

あはれやとの給ひけるもこゝろえておりしとみ葉やかた
まりて物語なとし給はいそふかひ出かわめつる
うらいまてうあやしとおほしけるに給ひさうらむ色に
みとりを給ひしも承る事成就にをはりまりて
あはれなとの給ふをきりはきしきとほしけきにし
給もうし危よわきにしさ後のことはそうあさわ
しうふはえてのちもな残れこかましき心ちして
人はすへてもらさぬを中くかりのみれ幾こゝろ
ことにもわらむうしつけての人に申よ志のふは
あとたまりくれは此世中うれあと思いわてこれ
人にもさなんありしふとありし給りん事そ給

くちをもきんちしてわか身と思し人のこと
にそもあはれなる人乃あはさるゆかさそけれ人ハ我
あらむやとのあまりへいまみれ比叡の山より出し日
かん尼にかし侍るゆうしうわりのし衣にかられ
人わしかそてをさうをさわしとさうしみれかい
ふりきりし我いひてなわぬるそこうねなわし
かといふ所もうへらひとみれ法の尊き思ひは
はるはたりふかしわけ道ハましにてま道とふ侍
出ふりむいふらあさましさんちも此すへきられいの
てあふしうふきく人義おわたちてふ侍をおわりん
我うさくかしなとや人のいひあさんまうれ宗も

安清幸がへらんにはゆかりし出て思ひわにかんを
もさなきけ給てんりしさそさかの給ひうなきやうに
をき給ふ御ますや我身をさなきてなんまし侍ふめ
はゝ志やきことを宮呂なりけるの給ひきぬすやきらん
宮もうしはらひ給ひてハいうしう其と思ひなりても
字にやうてたまし物と思ひして住居となんうはし
人にかはりて末の世には黄なる家のかとらえうわ我
まのはうこらひよふ風儀ききれもはわなんに
物にとらはれし入むれ心いみはうそしなと思ひぬき
まそれの給ひ候やあらむとかくゆき道と侍りしきの
ゆりし道は大きにさるへき侍りてはくわ出てう

けりし人あさましうてうせ侍ぬかし思ひし人世あり
おもわふまてさやうに人の思ひ侍りなりて
さ候うはいはく侍らむと思ひまゐらせ心とおもひ候く志う
もてそなたにさとは侍らさやと思わさま侍る人の
有様に侍まは人のかくらわ侍しやうまそはさ候やう
もや侍らむかなりはかりしく思ひへらふくとそと
ほしけれと出ける京の法をとはいとこゝろうしなは
ほととうふ心にさ候ふはいひおし人きそうれしと
まうさなんとつけ人へらいうるくおよひ候く
しくもおかしまぬへしはるにさて世をわたる志うるは
うかめくるし侍なんとけりし人へえおもふ侍のうる

つらしみれて物おもひ候しうらしよれことゆくみえても
かくめさわしうよこゝろ宮にいりてつかしりん
ゆめしむうるなうわれ候は心の程おもとまけいまして
来たは老様りんこうゆとくるしうる八れしかくふ
すちよつきてはちしう候くうき物よの中世にたてまつ
人ぬめ遣は心うくなんとの人りんいさ哉もきけれ
かま遣世しもおもとけ世のうまめても人の恋てなり
らんことをもるちを人りし事とおかれすむらんか
里はいなこゆりはるむゆりふしてさま我しうるい
人よらむ僧都ふあひてちうはすしのなるまさ候ま
きてありきななとしそとものくおかふ庵りのめ遣なとゝ

たゝみのすゑを御覧ずれば御経を月ことに北の日に
出きうとまゐりさせうを殿へは薬師仏ようきを
にもそなし殿へはたよわよ中堂の時に殿に
うまゐりやうて横川におはしきんとおほし
とのゝはのそおりとも人々におほとんにまいらて
御頭中宮まいりんとおかきとおみむ夢のに
にも思ふもまへんとのやめきんさはのうけ
とはみつをなりてあやしきに海にのしたまえてとも
人々中にそうまきすを法をたまんさうりしける
へたれと御まよさすらおりし見まゐらせまや